特定非営利活動法人 **アジア太平洋資料センター（PARC）**

2009 年度 活動報告書

もくじ

◆2009 年度をふりかえって…… 1

◆活動報告

調査研究・ネットワーク「連帯経済」…… 2

政策提言・キャンペーン …… 4

ＰＡＲＣ自由学校 …… 5

雑誌『オルタ』 …… 8

情報発信・ウェブサイト …… 9

オーディオ・ヴィジュアル（ＡＶ）…… 10

◆組　織 …… 12

◆会計報告 …… 14

◆賛同･主催･参加イベント …… 16

◆理事/事務局スタッフ紹介 と会員の皆様へのメッセージ…… 17

2009 年度をふりかえって

１．はじめに

2009 年度は、アジア太平洋資料センター（PARC）とパルシック（PARC Inter-Peoples' Cooperation：PARCIC）に組織分割をして 2 年目を迎える年でした。今年度は、分割後それぞれの NPO 法人が活動をさらに発展させることをめざしてきました。

この 1 年をふりかえると、金融恐慌が引き金となった世界同時不況の影響が、国内外での貧困・雇用状況の悪化、政治・経済への不信と不安、食糧危機などにさらに暗い影を落とし、グローバル経済の波の中に日本社会も存在し影響を受けていることを多くの人が実感した年でした。

またパルシックの活動現場であるスリランカでは、20 年以上にわたった内戦が政府軍の圧倒的な軍事力により一方的な形で「終結」とされましたが、人びとにとっての「平和」とは程遠い状況が続いています。イラクやアフガンなどでも同じように、真の紛争解決とは何か、国際社会の責任は重くつきつけられ、日本の私たちも常に考えさせられ続けてきました。

そんな状況の中、2009 年 9 月の政権交代によって民主党政権が誕生し、国内外に対する諸政策の転換が市民社会や社会運動の側から提起されてきました。PARC も微力ながら ODA 政策や債務問題に関する申し入れや、連帯経済を推進するための働きかけを民主党議員に行ないました。また、2010 年度の PARC 自由学校でも政権交代を受けて諸政策を議員とともに議論するクラスを企画しています。新政権に対する評価は厳しくもつべきですが、政権交代によって多くの人が政治に関心を持ち、政治を身近に考えるようになったことは事実です。これを日本社会の転換への契機ととらえ、引き続き政策提言や活発な議論の場づくりを進めたいと考えています。

２．アジア連帯経済フォーラムの開催

2003 年以来、PARC は「連帯経済」を活動の中心にすえさまざまな取り組みを行なってきました。2009 年度は東京で開催した「アジア連帯経済フォーラム 2009」に事務局団体として参画しました。フォーラムには、アジアからのゲストの他、社会的企業やコミュニティ事業、フェアトレード、市民金融、環境・福祉などにかかわる実践者・研究者・NGO/NPO が集い、互いの経験を学び合う機会となりました（詳細は P2 参照）。

フォーラムを通して、新自由主義のもとで日本とアジア、世界の人びとの生活が破壊されてきたという事実を知ると同時に、オルタナティブな社会を実現したいと願う人びとの新しい運動や事業が生まれていることが明らかになりました。また日本国内・アジアの豊かな経験を「連帯経済」として結んでいくことの重要性を、参加者がともに確認する機会となりました。

３．日本と世界の貧困を克服するための視点

2009 年は連帯経済の取り組みを通して、また日本国内の貧困が深刻化する状況を通して、もはや貧困は途上国だけの問題ではなく、また一国内の個別の政策転換だけでは解決するものではないと強く認識した 1 年でした。日本においては仕事や食、地域での人間関係など具体的な生活の場面で信頼や生きる権利を回復し、事業や運動、貧困をなくすための政策提言や社会運動がまず必要です。そしてそのことを通して、アジアや世界の人びとともに貧困を克服していけるような活動をつくる道筋を、現在の PARC は模索しています。

こうした視点に立ち、2009 年度は国内外の貧困を結び、解決するための取り組みを始めました。具体的には、PARC 自由学校にて「活動家一丁あがり」講座を開講、20-30 代を対象に「労働と貧困」をテーマに参加型・実践型のクラスとして実施しました。また 2010 年 2 月から「貧困」をテーマにしたオーディオ・ヴィジュアル（AV）作品の制作に着手、日本と世界で貧困が生み出されてきた構造や背景を伝えることに着手しています。新たな試みとして視聴者となる大学生自身が取材をし、「貧困」問題に気づき、考えていくという手法をとっています。

４．出会い、学びあう関係づくりのために

上記すべてと関連しますが、2009 年度は、PARC の長年の活動の成果として蓄積された国内外の情報や経験、人と人とのつながりを再発見し、新たな活動を生み出す力にすることに重点的に取り組んできました。連帯経済の実践者・研究者や、調査研究活動、オルタ、自由学校、AV などの部門間の連携や情報交換を活発にし、PARC の活動全体をより多くの人たちへ発信したいと考えています。

理事会・事務局も世代交代する中で、会員の皆さんとの顔の見える関係づくりに、さらに力を注ぎたいと考えています。会員の皆さんがもつ経験や考え、ネットワークを持ち寄って学びあえるような具体的な活動やしくみづくりも提案していきます。

日本で、世界で、私たちのめざすオルタナティブへの一歩を踏み出していくために、これまで以上のご参加・ご協力をよろしくお願いいたします。

連帯経済—アジア連帯経済フォーラム2009開催を中心に

2009 年度は PARC が連帯経済を日本国内そしてアジアレベルで推進していくにあたり大きな 1 年となりました。連帯経済とは、暴力的な市場経済によって貧困や雇用不安、地域経済の沈下、環境そして紛争などが深刻化する中で、それに対する対抗あるいはオルタナティブとして実践されている、人と人との信頼関係に根ざす小さな経済の総称です。具体的には、社会的企業や社会的金融、農漁村での協同組合、NPO・NGO 活動など多様な実践ですが、いずれも巨額なマネー資本主義と対極の、地域内あるいは人びとの間、市民社会に蓄積され還流している「市民資本」を基盤としています。日本にもアジアにも多くの実践事例がすでにありますが、個別あるいは分野・領域ごとの経験交流や情報の蓄積はあるものの、「連帯経済」としてのつながりはまだ十分ではありませんでした。

2007 年 10 月、フィリピン・マニラにてアジア初の「連帯経済フォーラム」が開催され、PARC も他団体とともに参加しました。その際に、2009 年には東京での第 2 回フォーラム開催が決まり、今年度はまさにフォーラムの実現に向けて PARC として全面的に取り組む年となりました。日本国内では、生協や市民金融、NGO・NPO、ワーカーズなどの実践団体からなるフォーラム実行委員会が組織され、PARC も実行委員団体として参加、また事務局団体としてフォーラム開催に向けた諸準備を進めました。

1．PARC 総会シンポジウム「新自由主義の終わりと連帯経済」

2009 年 6 月 7 日、PARC の会員総会にあわせる形で、連帯経済をテーマしたシンポジウム「新自由主義の終わりと連帯経済」を主催し、200 名もの参加者がありました。ここでは、新自由主義のもとでの市場経済が、国内外の人びとの暮らしを破壊してきた実態とその分析を行なった上で、連帯経済の実践と考え方を議論しました。日本では「連帯経済」という言葉自体が浸透していない中で、フォーラム開催に向けた第一歩を踏み出した場であったと同時に、PARC 会員の皆様にも連帯経済について知ってもらえる場となりました。

シンポジウム「新自由主義の終わりと連帯経済」(2009 年 6 月 7 日、総評会館にて)。パネリストは右から北沢洋子さん、アンドリュー・デゥットさん、湯浅誠さん、向田映子さん

2．アジア連帯経済フォーラムに向けた企画

アジア連帯経済フォーラム 2009 実行委員会では、11 月の開催に向けた連続学習会や現場視察など、誰でも参加できる場を企画してきました（下記参照）。限られた時間の中でしたが、社会的企業や、農村での女性たちの起業、貧困と社会的排除など多岐にわたるテーマで企画したところ、多くの参加者が得られました。PARC 会員や受講生の方々も積極的に参加してくださいました。

◆アジア連帯経済フォーラムに向けた事前企画

6/26	◆連続学習会『いのちのセーフティネットと連帯経済』
7/31	◆連続学習会『ラテンアメリカの連帯経済—参加型予算・労働者自主管理企業・フェアトレードの実践から』 ※(財)大竹財団との共催
8/28	◆連続学習会『社会的企業は市場経済を変革できるのか？—ソーシャル・ビジネス/コミュニティビジネスの現在』
9/27	◆連続学習会『地域の力、人の力——食と農の現場から語る「連帯経済」』 ※(財)大竹財団との共催
10/4	●学びの旅『有機農業がつなぐ地域——埼玉県小川町・霜里農場を訪ねる』
10/15	●学びの旅『貧困の現場から——NPO ほっとポットの地域で生きるための支援～』

3．アジアへの学びの旅：「韓国」

2007 年の第 1 回アジア連帯経済フォーラムの準備段階で、自分たちの身近な場・地域における連帯経済の実践事例を探し、出会っていくプロセスとして「学びの旅」という手法が提起されました。出会いと発見、そしてネットワーク化を行なうために重要な取り組みです。

フォーラム実行委員会では、開催に向けてすでに国内での「学びの旅」を実施してきましたが、2009 年度は国内だけでなく韓国における連帯経済を知る旅を企画、PARC からも 2 名の事務局スタッフが参加しました(2009 年 9 月 2 日～7 日)。

連帯経済のネットワークを進めるにあたり、日本、韓国、中国、台湾、香港など東アジア地域の連携は重要です。今回の学びの旅では、韓国で 2007 年に法制化された「社会的企業」の実態と課題を知ると同時に、それらを支える基盤としての中間支援組織を訪問しました。韓国で社会的企業が興隆する背景には、97 年の IMF 危機以降に広がった貧困に対する政府の対応と、民主化闘争以来、市民社会に培われてきた草の根の運動や NGO などの努力がありました。

すでに日韓では生協やワーカーズ・コレクティブ、有機農業を推進する運動など、多様な分野での実践交流は行なわれており、それらを「連帯経済(韓国では「社会的経済」という呼称で浸透しています」として、アジアレベルでのネットワークをしていくことが、フォーラム実行委員会としての課題でした。この訪問の結果、5 団体からのフォーラム参加が実現しました。

４．アジア連帯経済フォーラム 2009

これまで述べたような準備プロセスを経て、11 月 7 日～10 日、国連大学、青山学院大学、東京ウィメンズプラザにて、アジア連帯経済フォーラムを開催しました。フォーラムにはアジア各国を中心に EU、カナダなどから海外ゲストが 40 名参加しました。また日本国内からは約 400 名以上の参加者があり、連帯経済やオルタナティブな経済への関心の高さがうかがえました。

フォーラムの最初の２日間は国際会議（全体会・分科会）、3 日目は国内の現場を海外ゲストとともに訪問する「学びの旅」を実施しました。

アジア連帯経済フォーラムのメイン会場である国連大学。400 人以上の参加者がありました

全体会では「グローバルに広がる連帯経済」「アジアにおける多様な連帯経済の実践」という大きな枠組みを報告・議論した後、「社会的企業」「社会的金融」など連帯経済についての重要な要素についてのセッションを設けました。また 2 日目の分科会では、「社会的金融」「フェアトレード」「農業と地域」「福祉・医療サービス」「グローバル経済の規制と国際連帯税」というテーマに分かれ活発な議論を交わしました。

さらに 2 日目の全体会では、連帯経済を促進するために必要な評価や達成基準についてのセッションを持ったうえで、本フォーラムの成果として「コンセンサス文書」が提起され、会場との議論を経て採択されました。このコンセンサス文書は、フォーラム参加者がそれぞれの国・地域に持ち帰り、連帯経済の概念やアジアの実践をより豊富化して具体的に広げるための助けとなるよう、連帯経済の定義やその要素、私たちが今後連帯経済を促進していくためのビジョンについてまとめたものです。

続く 3 日目には、日本国内の「学びの旅」として、横浜市、厚木市、埼玉県小川町の 3 つの現場を訪問しました。横浜市では市民による社会的企業や女性たちの起業、ホームレス支援の現場を訪問しました。厚木市では多様な NPO やワーカーズ・コレクティブがネットワークをし医療や福祉、子育てなど地域でのセーフティネットを築いている事例を学びました。さらに小川町では、日本における有機農業の先駆的な霜里農場とその周辺地域を訪れ、有機農業と地域での仕事づくり、地域におけるものや人の循環について学びました。

５．アジア連帯経済フォーラムの成果 2011 年マレーシア会議に向けて

アジア連帯経済フォーラムは、日本国内外の連帯経済の実践や可能性について、参加者が気づき経験を学びあう場として大きな成果をあげました。アジアも日本も、金融恐慌を発端とする世界同時不況の影響下にいまだあり、また長期的な視点でいえばグローバル経済による資源の収奪や格差、貧困という問題に直面しています。「農民が食べられない」という状況が、カナダやタイ、インドネシア、そして日本から次々と報告されたり、貧困層が社会的にも排除されているという事例が報告されるなど、アジアに共通する課題が浮き彫りにされました。

同時に、各地の実践事例からの学びも多くありました。日本の有機農業や「地産地消」という考え方、また生協など具体的なしくみや、農村における起業例などは、アジアからの参加者の大きな刺激となったという感想を聞きました。またヨーロッパで推進されてきた社会的金融のネットワークは、今後のアジアにとって参考になる内容が多くありました。こうした相互交流の機会を経て、より具体的な活動をそれぞれが自らの現場で広げ、2 年後の 2011 年、マレーシアで開催される第 3 回アジア連帯経済フォーラムに持ち寄ることがフォーラムの最終日に確認されました。

日本で初めて「連帯経済」と名づけられた国際会議が開催された意義は大きく、またそこに全面的に参画できたことは、PARC にとって、これまでの活動の蓄積を改めて見直し、新たな人たちと出会うプロセスとしても大きな成果でした。今後は、国内外の事例をさらに深めたり、理論的な考察を行なうなどして、次回のマレーシア会議に参加していく予定です。会員の皆様にも活動を呼びかけていきますので、ぜひ引き続きのご参加・企画協力などをお願いいたします。

政策提言・キャンペーン

債務問題の解決への取り組み

2008 年度、北海道洞爺湖にて開催された G8 サミットにて、PARC は他団体と協力し途上国の債務問題解決に向けてのワークショップを開催しました。

2009 年度は債務問題に関して、エクアドルで債務問題の解決に取り組む「ジュビリー・エクアドル」のデルファ・マンティージャさんを迎え、講演会「債務、貧困、気候変動—変革が進む南米エクアドルは地球規模の課題にどう取り組むのか」と、院内集会を開催しました（2010 年 3 月 19 日。他団体との共催）。

南米のエクアドル共和国では 2007 年 1 月に発足したラファエル・コレア政権のもと、さまざまな改革が進められてきました。マンタ米軍基地の継続使用の拒否、水や食料へのアクセスを基本的人権と定めた新憲法の制定、先住民を苦しめ環境を破壊してきたアマゾンにおける石油開発の中止、世界銀行・IMF を通じた先進国や多国籍企業による経済的支配からの離脱、従来の多国籍金融機関とは異なる地域発展と統合のための「南の銀行」への参加など、人口 1300 万の小さな国の人びとの挑戦は、地球の裏側の日本をはじめ世界各地で注目されています。

なかでも 2008 年 12 月にコレア大統領が発表した対外債務の一部支払い停止は、多くの途上国の人びとを勇気づけました。この債務の支払停止は、エクアドルに課せられた債務が、「貸し手」である豊かな国や多国籍金融機関の都合で貸し付けられたり、借り手の側の国のごく一部の人（たとえば独裁者）にしか恩恵をもたらさかった「不公正な債務」であるという政府の監査委員会の報告書に基づいたものです。「貸した以上に引き剥がす」という債務問題が解決されない限り、エクアドルをはじめとする世界の貧困問題は解決されません。日本はいまもエクアドル債務の債権国のひとつであるという意味でも、その責任は大きいといえます。

講演会には約 50 名の参加者があり、債務・貧困、気候変動、環境破壊など地球規模の課題について、一進一退を繰り返しながら変革を進めてきた南米エクアドルで活動する社会運動はどう考え、いかに取り組んできたのかを議論しました。また院内集会も開催し、日本の政策に対する働きかけも行ないました。

エクアドルからデルファ・マンティージャさんを招いての集会。環境債務について先進国の責任を訴える

イスラエルのパレスチナ占領に対するアクション

「スピークアウト for アクション：イスラエルを変えるために」

2008 年 12 月 27 日に始まったイスラエルによるガザ侵攻に対し、日本でも抗議行動や集会、デモが行なわれました。PARC は 2009 年 1 月、「スピークアウト＆デモ：イスラエルは占領とガザ侵攻をやめろ！」の実行委員団体として参加し、イスラエルの政策を変えるためのキャンペーンに取り組んできました。長年パレスチナ占領を続けているイスラエルが根本的に政策を改めない限り、この地における問題はいつまでも解決しません。

同実行委員会では、2009 年度も引き続き政策提言やキャンペーンを行ない、2009 年 5 月 31 日には「スピークアウト for アクション：イスラエルを変えるために」を開催しました。PARC は実行委員団体として参画、分科会 1「イスラエル製品／関連企業をボイコットする」を担当しました。会議全体では、パレスチナ占領の実態と、イスラエルの政策転換を求める内容の全体会・分科会を行ないました（下記参照）。

シンポジウム	板垣雄三（東京経済大学名誉教授）/東澤靖（弁護士／明治学院大学法科大学院教授）/役重善洋（パレスチナの平和を考える会） 山崎久隆（たんぽぽ舎／劣化ウラン研究会）
分科会 1	イスラエル製品／関連企業をボイコットする ［報告］役重善洋＋事務局
分科会 2	イスラエルの武器生産・取引・使用の実態を明らかにする　［講師］山崎久隆
分科会 3	指導者たちの戦争犯罪を裁かせる 報告］寺中誠＋事務局
分科会 4	「歴史事実」の確認からはじめよう ［報告］実行委／［コメンテーター］板垣雄三

ＰＡＲＣ自由学校

１）企画内容

2009年度は計27クラスを企画し、受講生数は423人でした（P7参照）。残念ながら3クラスが申込者が少なく不成立となりましたが、その理由はテーマや分野に絞った効果的な宣伝が弱かったこと、企画段階における詰めが弱かったこと、魅力的なタイトルをつけられなかったこと、昼間の時間帯のクラス対象者への宣伝がうまくできなかったこと（特に「モノが語る世界―暮らしから考えるグローバリゼーション」）等であると考えられます。

2009 年度自由学校のパンフレット（左）と、「環境と暮らしの学校」を中心にしたリーフレット（右）

【人気の高かったクラス】
〇社会的起業！―わたしの思いをカタチにする(33人)
〇エコを仕事にする(31人)
〇オルタナティブ健康術(30人)
〇麻で始める自然生活(25人)
〇連帯のための哲学―生きる場のことばと実践から(25人)
〇映像で出会うアフリカ(21人)
〇東京で農業！(42人)

2009年度は、特に「農業」「エコ」「地域自立」「環境」「自己治癒力」「社会的起業」「国際協力」等をキーワードにしたクラスの人気が高い傾向が見られました。また現場訪問や活動体験の機会が多いクラスは受講生同士の参加度・満足度も非常に高いものとなりました。グローバル資本主義経済によってもたらされた世界的な経済不況が私たちの生活にも影響を与える中、社会の制度疲労や雇用不安、“生きづらさ”を多くの人が実感しています。そんな中、「今こそ危機をチャンスにして、良い方向に社会を作っていきたい」「多様な生き方があることを知りたい」「自分の身の回りから、足元から、オルタナティブな生き方や暮らしを実践するために自由学校で学びたい」と思い受講する人が増えているのがここ数年の顕著な傾向です。

２）特別講座「活動家一丁あがり」

2009年度は新たな取り組みとして、特別講座「社会にモノ言うはじめの一歩～活動家一丁あがり」を10人の実行委員で企画・開講しました（協力：日本福祉大学アジア福祉社会開発センター）。約50人の申込があり、選考試験の結果、44名が受講する大人気のクラスとなりました。

この講座は、受講料を一回300円と格段に安く設定できたため、派遣社員や非正規職、学生など、経済的な理由から普段は自由学校に参加しにくい人たちが、当事者として参加できました。講座では、「労働と貧困」をテーマに、日本における貧困の現状や労働運動の歴史などを学ぶと同時に、記者会見の開き方、デモ申請やロビイングの仕方、講演会やイベントを開催する際の下準備から当日までの流れなど、社会にモノを言うために必要な具体的方法を学びました。また、自身の労働環境や生き方・働き方の展望について報告・議論しあう中で、何かに挑戦し失敗すると取り返しがつかないばかりか、地の果てまで転げ落ちていってしまう日本社会の不寛容さが浮かび上がってきました。

講座では、各地の講演会やイベントの運営ボランティアをすることも組み込み、2010年3～4月には「卒業試験」として、受講生自らがイベント（講演会・デモなど）を企画・実施する課題に取り組みました。

その結果、受講生同士が自己の仕事環境や社会に蔓延する“貧困”や“生きづらさ”について日々話し合い、どうすればこの社会を変えていくことができるのかを共に考え、実際に一緒にはじめの一歩を踏み出す参加型でアクティブなクラスとなりました。

卒業イベントに向けた「模擬記者会見」で企画したイベントをアピールする受講生

３）宣伝

27クラスを「ことばの学校」「世界の学校」「社会の学校」「環境・暮らしの学校」「表現の学校」の5つのカテゴリーに分け、各ターゲット層に向けた宣伝を行ないました。例年同様、受講生やボランティア・インターン、他団体にご協力いただき、多くのイベントや講演会でパンフレットを配布・設置、さらにインターネットで広報することもできました。また、各クラスの講師にもご協力いただき、ブログやホームページにて宣伝もしていただきました。3月～開講時期まで精力的に広報活動を行なったのが、受講生数を昨年の352人から444人に伸ばすことができた大きな要因の一つと考えられます。

４）運営

2009年度は昨年度に引き続き「クラス運営の質を高める」ことを目標に取り組みました。教室の整備や機材管理等、基本的なインフラの改善の他、受講生・講師の交流の場（授業後の交流会）やメーリングリストの活用を呼びかけました。交流の場も居酒屋だけではなく、教室で持ち寄りパーティを行ない、静かにゆっくり話す場を提供したり、他イベントに共に参加したりと、授業外での受講生の交流を促すよう務めました。しかしながら、8月の夏休み以降は、集積率が落ちるクラスもあり、例年の課題となっています。2010年度自由学校の運営では、1ヶ月間の夏休みに宿題を出したり、交流会を組むなどして9月からも来やすい雰囲気をつくる必要性を強く感じています。また、クラスごとに開設しているMLが事務局からの情報送信のみになりがちなので、次年度では講義内容やまとめを受講生が報告するなどして、受講生同士がこれまで以上にML上で情報交換や意見交換できるように働きかけます。

講義中については、講師から受講生への講義のみで終わり、受講生同士がクラス内で議論する時間がなかなかとれない状況でした。2010年度は、クラスによっては質疑応答の後にグループ・ディスカッションの時間を入れ、授業の時間内でも受講生と話し、つながれる空間を作っていきます。

「エコを仕事にする」クラスで訪問した那須の麦畑。現場を訪れるクラスは参加率が高く交流も活発です

自由学校祭り 2009 では各クラスの受講生がさまざまな発表を行ないました。講師とともに演奏する三線クラス（写真上）と、ムックリを演奏するアイヌ語クラスの受講生（写真下）。

５）「自由学校春まつり」（修了イベント）の開催

１年間を締めくくる修了イベントとして数年前から始めた「春の自由学校まつり」を、2009年度も開催しました（2010年3月7日　於・韓国YMCA　140名以上が参加）。受講生有志による実行委員会で企画から準備、当日の運営を行ない、クラスを超えた交流・発表の場として盛り上がりました。自由学校講座のみならず、自由学校の課外サークルである「DIOの場」からも3クラブが参加しました。

当日は各クラスの演奏・ダンス（アイヌのことばと文化を学ぼう、ラテンダンス、三線クラブ〈DIO〉等）、各クラスの一年を振り返っての発表（コンビニ調査団、英語で憲法9条を語ろう、エコを仕事にする、活動家一丁あがり等、高松田んぼの会〈DIO〉）、デモクラシーナウ！クラスによる自主制作ドキュメンタリー映画の上映に加えて、皆勤賞の発表や農業クラスによる野菜の直売、写真や展示（写真教室、コモンズの旅・祝島、現代短歌クラブ〈DIO〉、テレビさようならクラブ〈DIO〉）、出店（映像で出会うアフリカ、社会的企業！）やバザーなど魅力的な出し物・出店が揃いました。

◆参考資料：PARC 自由学校　2009 年度受講生数

【ことばの学校】		
1	超カンタン！英語で憲法９条を語ろう	15
2	キムとルイスの『Democracy Now!』	15
3	ジェンスの英語で発信！	13
4	海外 NGO 資料から世界を読もう	10
5	武藤一羊の英文精読	9
6	アイヌのことばと文化を学ぼう	7
【世界の学校】		
7	ポスト・新自由主義の世界を読む	17
8	「食料危機」がやってくる!?—どうする私たちの食と農	不成立　7
9	一杯の紅茶から見る世界　【パルシック講座】	5
10	映像で出会うアフリカ	21
11	悩める中国—隣人との対話のために	不成立　3
12	モノが語る世界—暮らしから考えるグローバリゼーション	不成立　1
【社会の学校】		
13	社会的起業！—わたしの思いをカタチにする	33
14	連帯のための哲学—生きる場のことばと実践から	25
15	人の移動から見る近・現代史	19
16	コンビニ調査団！—便利な暮らしの後ろには…	5
【環境・暮らしの学校】		
17	江戸に学ぶエコ—循環型社会とその思想	15
18	麻で始める自然生活	25
19	エコを仕事にする	31
20	オルタナティブ健康術	30
21	森・川・海—さあ、コモンズの旅へ　*1	45
22	東京で農業	42
【表現の学校】		
23	金村修の写真教室	11
24	ムーブメント三線教室	—　*2
25	ニャマ・カンテの西アフリカン・ダンス	不成立　1
26	藤巻裕治のキューバン・サルサダンス	7
【特別講座】		
27	活動家一丁あがり	44
合　計 *3		444

*1：徳島 15 名、祝島 13 名、富士山麓 9 名、北海道 8 名
*2：クラスとしては開講せず、「三線クラブ」として運営
*3：不成立クラスの申込者は受講生の合計に含まれていません

(人)

『オルタ』

1)はじめに

雑誌『オルタ』は、2008 年 6 月より月刊から隔月刊化し、誌面をリニューアルしてきました。隔月刊化にともない、ページ数を増やしデザインも一新、またこれまで登用してこなかったような書き手の発掘に取り組んだことで、新たな読者を掘り起こすことができました。

しかしその一方で、2008 年末から刊行日が大幅に遅れてしまい、2009 年度末（2010 年 3 月末）時点で約 2 か月の刊行の遅れは巻き戻せておりません。会員・購読者の皆さんにはご心配・ご迷惑をおかけする結果となってしまいました。2010 年度初めの時点で、刊行スケジュールが正常化する見込みですので、今後は定期発行を基本としたいと考えています。

PARC がこれまで発行してきた日本語の雑誌を振り返ると、『世界から』『季刊オルタ』『月刊オルタ』そして隔月刊になった現在の『オルタ』と、どの時代も PARC の活動と日本、アジアそして世界を切り結び、人びとの運動や多様な生き方を伝え、新たな社会構想に向けた提言を行なうことをコンセプトにしてきました。

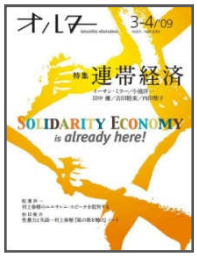
しかし一方で、多くの雑誌媒体の休刊・廃刊に表されているように日本の出版状況全体が厳しくなる中で、また日本社会全体の思想・言論状況が「内向き」になる中で、『オルタ』がどのような人たちに何を伝えていくのかということも問われています。PARC にとって、『オルタ』は会員の皆さん（特に首都圏以外の会員の方）と価値感や情報を共有できる重要な媒体と位置づけています。また、会員以外の一般読者に PARC の活動や理念を知ってもらうためのメディアであり、広い意味での社会運動を広げるための媒体です。理事会・事務局では 2010 年度に会員の皆さんと一緒に、『オルタ』のあり方を議論できる場（具体的には 2010 年度の会員総会）をつくり、ご意見・ご提案をいただきたいと考えています。

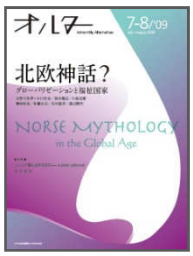
２）2009 年度の特集内容

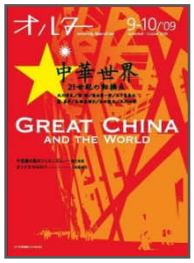
＜新自由主義の崩壊とオルタナティブ＞

新自由主義とカジノ資本主義がもたらした、グローバルな危機と、それに対するオルタナティブの実践と理論に焦点を当てた特集を組みました。また現在の PARC の活動の柱であり、09 年秋に開催されたアジア連帯経済フォーラムに先駆けた特集を組みました。またそのフォローアップ号として、09 年春に特別号として「連帯経済フォーラム報告」号を発行予定です（6 月 25 日発行予定）。

〇連帯経済（09 年 3/4 月号）
〇社会的企業―地域・仕事・連帯社会をつくる
（10 年 1/2 月号）
〇居住革命!―反富裕･DIY･スクウォット（09 年 5/6 月号）







＜時代の大転換点を読み説く＞

1989 年 11 月の「ベルリンの壁」崩壊から 20 年の変化を象徴する諸地域にフォーカスしつつ、それらの相互関係から世界情勢を読み解く特集を企画しました。また大きな時代の流れの中で大国となった中国への目線を問い直す特集も組みました。

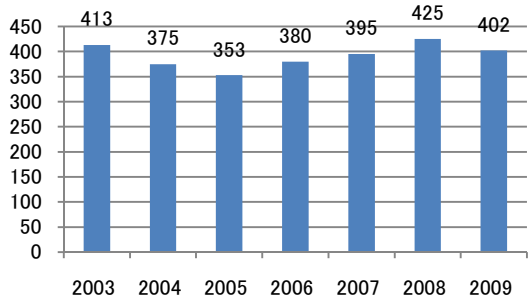
〇1989→自由と民主化の神話（09 年 11/12 月号）
〇中華世界―21 世紀の転換点（09 年 9/10 月号）

３）制作・販売面

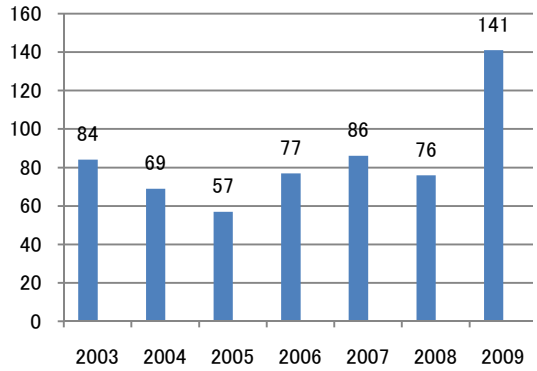
2008 年の隔月刊化に伴い、都内を中心に書店営業を強化し、地方小出版流通センター経由での書店配本の割合を増やしてきました。１号ごとのチラシを書店、映画館、劇場、カフェ、ショップ、クラブなどに配布し、リニューアルを印象づけ、知名度の向上に努めてきましたが、社会全体の出版不況の中にあり、購読者獲得・バックナンバーの売り上げともに苦戦している状態です。また雑誌『オルタ』に限らず、現時点で PARC では広報・営業の専任担当者を置いていないため、ターゲット層を絞った効果的な宣伝が十分できていないということも理由のひとつです。

一方で、20 代から 30 代の社会問題に関心を持つ層を対象に地道に営業活動をかけながら、購読部数を確保していく必要があります。ネットでの口コミの評価が大きく売上を左右する状況があり、会員の皆様にもぜひ宣伝でご協力いただきたく、また拡販方法についての積極的な提言をいただければ幸いです。

オルタ定期購読者の推移



オルタ単発売上の推移



情報発信・ウェブサイト

現在、PARC の情報発信は雑誌『オルタ』やオーディオ・ヴィジュアル（AV）作品などを中心に、会員 ML やウェブサイトなど多岐にわたっています。すでにウェブサイトからの受講申し込み、商品購入は全体の 7 割強になっていますが、特にこの数年でウェブサイトからのボランティア・インターン希望や会員入会者数も増えています。

こうした状況から、2009 年度はウェブサイトからの各種情報の迅速な発信を心がけてきました。また 2010 年度の課題にもなりますが、会員 ML の活用方法の改善（海外の情報や集会報告などをさらに強化）や、新たなメディアとしてのツイッターの活用なども視野に入れています。

英文発信については、長年の課題となっていますが、今年度は「アジア連帯経済フォーラム」を開催するにあたり日本国内の実践事例を英語にして海外発信することも多くあり、フォーラムのウェブサイトと PARC のウェブサイトの相互リンクを行なってきました。また、オーディオ・ヴィジュアル部門では、今年度制作した２本の作品の英語版を制作しました。こうした作品をアジアの研究者やジャーナリスト、漁民・農民団体や NGO などに発信することで、国際的なネットワーク構築を計画していますが、今年度は十分な発信（具体的にはメール送信や海外メディアへのプレスリリースなど）ができておらず今後の課題として残ります。中期的な計画ですが、会員の皆さんの関係する海外団体・個人などのネットワークを活かす形で、PARC の海外発信を強化していきたいと考えています。

★http://en.parc-jp.org:8080/en/

オーディオ・ヴィジュアル(AV)

1)　全体を振り返って

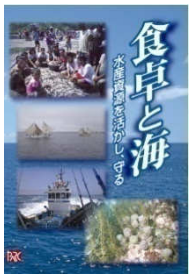
2009 年度は『食卓と海―水産資源を活かし、守る』と、その英語版『Sustainable Fisheries -The Japanese Experience』、『海と森と里と―つながりの中に生きる』の 3 作品を制作しました。オリジナル作品を年間 2 本制作するという目標を達成できたとともに、PARC として初めての英語版作品を完成させることができました。

いずれの作品もグローバリズム研究の一環としての「水産資源（さかな）研究会」で得られた成果をもとに制作しました。『食卓と海』は、地球環境映像祭にてアース・ビジョン賞を受賞するなど評価も高く、他部門との連携を図り作品の質を高めるという計画を実現させることができました。

現在、PARC の AV 作品の主要な視聴者は大学生・高校生ですが、今後は小～中学生向けの作品づくりも計画しています。今年度は低年齢層を対象にした作品は制作できず、来年度以降の課題となっています。また、世界の優れたドキュメンタリー作品や教材を翻訳し、「世界の現実」シリーズとして販売することや、購買層である学校教員の方々との連携を深めることも、特に来年度以降に重点化すべき課題となっています。

2)　2009 年度に制作した作品とその内容

食卓と海　-水産資源を活かし、守る-



PARC の水産資源研究会が調査した、コミュニティによる水産資源管理・海洋環境保全の事例をまとめました。水産資源の枯渇が世界的に懸念されている現在、海辺の慣習や漁業権に基づく資源管理が持続可能な漁業にとって有効であることを伝えるビデオです。

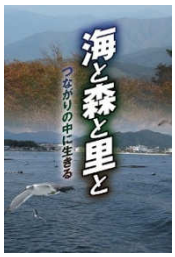
地方新聞に紹介されたため、学校や図書館だけでなく、地方自治体の行政の資源管理や水産振興に関わる部署から注文がありました。資源管理の現場で見ていただける作品をつくれたことは、AV 部門だけでなく、調査研究部門にとっても大きな成果となりました。

Sustainable Fisheries -The Japanese Experience-

『食卓と海』の英語版です。特に水産資源の枯渇が深刻なアジアの国々で活用していただくことを目指し、慣習による日本独自の漁業権と、漁業権に基づいて資源を管理する漁業共同組合の取り組みを紹介しました。

PARC で初めての英語作品を制作できたことは大きな成果ですが、広報が課題です。会員のみなさんのお力もお借りしながら、国際的に発信していきたいと考えています。

海と森と里と　-つながりの中に生きる-



経済発展を重視する戦後の「開発」によって自然の循環のしくみが壊され、一次産業が変えられてきた事実と、その影響を追った作品です。水産資源研究会が調査した気仙沼の事例をさらに深めることによって完成しました。またこの作品は、過去の自由学校講師や、『オルタ』で取材した方など、これまでの関係性を活かして制作し、部門間の連携を実現することができました。一方、取材内容が林業・農業・漁業・ダムなど多岐に及んだため、初期段階での取材・構成が甘く、制作に時間がかかりました。今後は、教材として内容の質を保証していくためにも、総合的に作品の内容を監修していただく専門家とともに、コンセプトについての十分な議論と綿密な調査を行ないながら、作品化を進めていくことが鍵となります。

3) 宣伝・販売状況

2009 年度は、映像祭への出品、Web からのダウンロードシステムの活用など、一部目標は達成できましたが、新たな販売拡大に取り組めませんでした。特に、大手書店の新規開拓、発送名簿の拡大は課題として残っています。

一方、この 2-3 年で定期的に作品を発表できていることもあり、2009 年度は昨年度よりも売上げを伸ばすことができました（P11 参照）。今後は定期的な作品制作と、宣伝を拡大することの両立が課題です。

◆参考資料　ビデオ作品売上と購入者

■2009 年度　注文数　（のべ）

	計	一般（個人）	書　店	PARC/ パルシック会員
単　品	781	328	423	30
セット	101	44	54	0

■2009 年度　単品ベスト 5

	作品名（制作年）	売上本数（本）
1	パームオイル　（2009）	104
2	食卓と海　（2009）	100
3	バイオ燃料　（2008）	50
4	食べるためのマグロ、 売るためのマグロ　（2007）	48
5	海と森と里と　（2010）	47

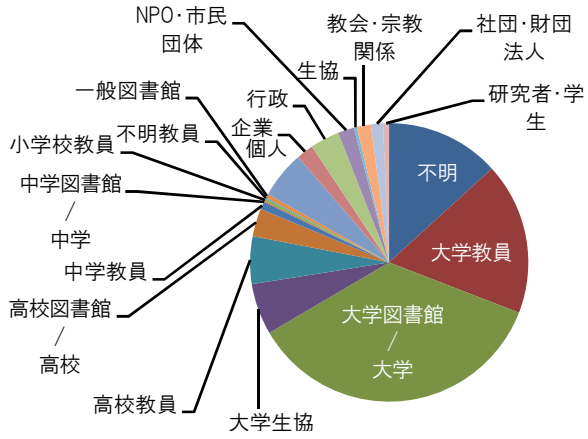
■2009 年度　セット　ベスト 5

	セット名	販売セット数
1	新作 DVD セット	21
2	世界の子どもたちは今	14
3	女性の視点から見る開発	13
4	全巻セット	12
5	モノから見える南北関係	10

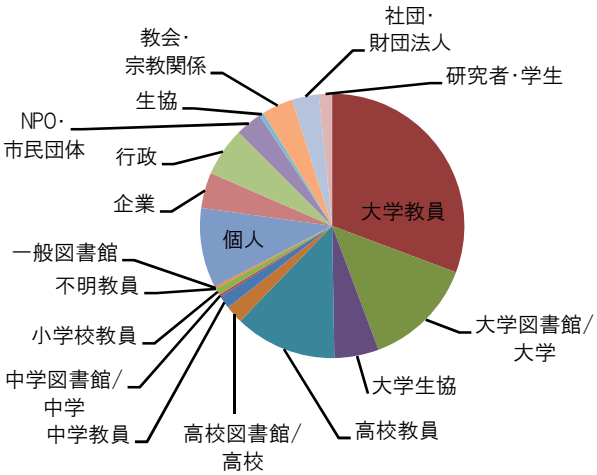
■2003～2009 年度の AV 部門売上推移

■購入者の内訳

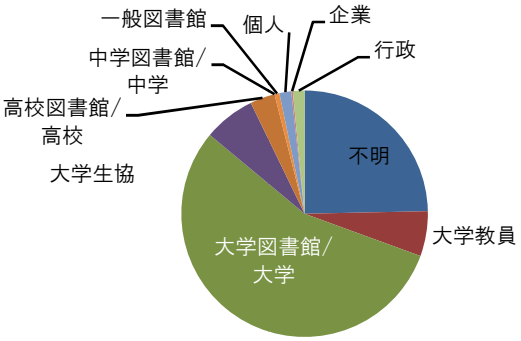
1. AV購入者(全体　のべ855件)



2. 直販購入者(のべ368件)



書店経由購入者(のべ458件)



※　個人は、漁業者、農業者、ファシリテーター等
※　行政は各都道府県の教育センターや環境センター、水産課等
※　企業は、花王やサラヤなど作品に関連する企業のほか、CSR 部等
※　社団・財団法人は JICA 図書館、自然環境研究センター等

組　織

１．会員

2010 年 3 月 31 日現在、568 人の会員の皆様が PARC の活動を支えてくださっています。最近の傾向としては自由学校を窓口に会員となるケースが増えていることや、ウェブサイトからの会員申込が微増していることが挙げられます。

2009 年度は組織分割後に PARC の活動をより充実させていくための過程にありました。理事会・事務局では会員同士・会員と理事やスタッフとの顔の見える関係づくりに向けて何ができるかということを継続して議論してきました。2010 年度の課題となりますが、具体的には、①会員メーリングリストにて、シンポジウムや活動の報告を迅速に流すなどして、会員への情報発信の質と速度を改善すること、②会員の皆さんに十分知られていない AV 作品を視聴してもらい、議論する場を企画すること（2010 年 4 月 9 日「魚魚魚映画祭」を開催）、③雑誌『オルタ』にて「会員紹介」コーナーを設けること、などを計画しています。

２．インターン・ボランティア

PARC の日常的な活動は、多くのボランティア・インターンの方々によって支えられています。特にこの数年で、インターネットの掲示板や各種メーリングリストから PARC を知り、ボランティアとして登録したいという方が増えています。こうした状況を受け、2009 年度はボランティア・インターン制度の整備と充実に取り組みました。

具体的には登録時のボランティアシートを使いやすい形に改善したり、初めて来た方に PARC の活動内容を理解していただくためのオリエンテーションの時間を設けました。また特に希望者の増える 3 月-5 月にかけて、「ボランティア説明会」の実施を定例化しています。

ボランティアの方々にお願いする仕事は、『オルタ』や AV 作品のチラシ、自由学校のパンフレットの発送作業、各種データ入力、商品発送、資料整理、インターネットへの書込み（広報）など多岐にわたります。また翻訳作業、テープリライト、校正などの自宅作業や、休日のイベントでの仕事にも多くの方に参加していただいています。

ボランティアがきっかけで自由学校を受講される方がいたり、集会のお手伝いをしていただいたりと、ボランティア参加も PARC の活動を知る機会の一つとなっています。

インターンについては、短期長期ともに学生を中心に受け入れを行ないました。長期インターンには、ある程度責任のある仕事をお願いするように心がけました。

今後も、継続してボランティア活動に参加していただくために、PARC で開催するイベントや集会などにも、積極的に来ていただけるよう声をかけていきたいと考えています。会員の皆様も、ぜひお気軽に発送やイベントの際にボランティア参加をしていただけますよう、お願いいたします。

■会員種別

計 568 人（2010 年 3 月末日現在）

イベントではいつも多くのボランティアの皆さんに参加・ご協力していただいています（2009 年 11 月、アジア連帯経済フォーラムにて）

３．姉妹団体・パルシックとの協働

組織分割から 2 年目の 2009 年度は、各団体が活動をより充実させることを第一に考えた上で、下記のとおり具体的な連携・協力を行なってきました。

・イベントでの協力（グローバルフェスタ、アースディなど）
・報告会・集会などでの協力（パルシック：東ティモール・スリランカ報告会、PARC：連帯経済フォーラム、自由学校まつりなど）。主に広報、当日の出店、人員拠出などで協力
・自由学校での企画（パルシック講座「一杯の紅茶から見える世界」クラス開講など）
・メーリングリストでの情報発信（集会案内など）
・『オルタ』にてパルシックのインフォメーションコーナー設置
・ボランティア（PARC ボランティアがフェアトレードにも興味がある場合、パルシックボランティアにも登録するなど）

こうした日常的な協力の他に、PARC のグローバリズム研究「水産資源（さかな）研究会」にて訪問・調査したマレーシアの漁民団体（マングローブ植林を行なう）の支援に向けた取り組みをパルシックが開始するなど、「調査・研究」と「具体的な現場支援」という協働・連携の芽が生まれました。今後は、それぞれの強みを活かして、例えば「グローバルな貿易の問題点」や「連帯経済」の事例や理論を PARC が調査研究として行ない、「貿易を公正にするための一つの取り組みとしてのフェアトレード」の実践をパルシックが行なうこと、そしてその両面を広く発信していくことなど、多くの可能性があると考えています。

2010 年 3 月には両団体の合同理事会を開催し、この 2 年間でそれぞれが取り組んできた活動の共有や、今後の連携や協力のあり方について議論をしました（今後も年 2 回ペースで開催予定）。

４．事務局

2008 年度の監査報告にて指摘を受けた項目について、理事会・事務局ではこの 1 年間、優先順位をつけながら活動の充実と組織の改善・整備を進めてきました。その中でも事務局スタッフの労働環境の整備の一環としての社会保険加入については、今年度は実現できず、2010 年度の課題として残っています。

また、2009 年 6 月の会員総会および総会報告書にてすでにご報告しましたが、2009 年 1 月、事務局スタッフの一人が個人で加入できる労働組合に加入し、組合と PARC 理事会との間で労働条件をめぐる団体交渉を行ないました。数回にわたる交渉の結果、2010 年 1 月に当該スタッフと PARC 理事会、労働組合の間で和解に達しました。

事務局スタッフの労働条件にかんしては、上記の社会保険加入を含め今後 2-3 年かけて整備していく計画です。その実現のためには、持続的で安定した財源の確保と、多岐にわたる PARC の活動にご参加・ご協力いただくしくみが不可欠です。理事会としては会員の皆様からのご意見、具体的な活動への助力を得ながら、PARC の組織基盤を強くしていきたいと考えています。また同時に、今回の経緯を踏まえ、既存の労働法の枠に収まらぬ NGO・社会運動体としての PARC スタッフの働き方の独自性と、一人ひとりの最低限の生活を法的・経済的に保障するという課題とを、個別具体的な局面でなんとか両立させていく困難な道筋を模索していきたいと思っています。

ぜひ日常的に PARC の活動への率直で忌憚のないご意見をお寄せいただき、活動にご参加いただけるようお願いいたします。

2009年度　会計報告

■活動計算書（2009年4月1日～2010年3月31日）

科　　目	金　額	金　額
【経常収益】		
ビデオ売上	12,050,951	
オルタ購読料	1,746,724	
会　費	5,070,700	
寄付金	84,257	
受講料	14,797,105	
雑収入	737,069	
オルタ売上		
ブックレット売	99,225	
エクスポジャー	1,445,800	
参加費収入	753,627	
受取利息	3,336	
雑収入	315,151	
経常収益合計		38,519,202
【事業費】		
期首商品棚卸高	1,076,151	
合　計	1,076,151	
期末商品棚卸高	1,262,632	
商品売上原価		-186,481
当期事業費		16,849,484
事業費合計		16,663,003
【管理費】		
管理費合計		25,920,797
当期正味財産増減額		△4,064,598
法人税等		70,000
前期繰越正味財産額		2,318,140
次期繰越正味財産額		△1,816,458

■事業費および管理費　［単位：円］

科　　目	金　額	金　額
【事業費】		
雑　給	428,200	
外注加工費	1,068,851	
荷造運賃発送費	630,415	
旅費交通費	954,521	
通信費	510	
賃借料	87,925	
印刷費	3,235,834	
講師料	3,619,045	
ビデオ制作費	2,980,071	
原稿料	2,093,074	
オルタ制作費	231,688	
エクスポ経費	1,333,837	
材料費	185,513	
事業費合計		16,849,484
【管理費】		
給料手当	12,963,157	
雑　給	333,590	
法定福利費	147,982	
福利厚生費	1,049,952	
荷造運賃発送費	105,420	
広告宣伝費	42,141	
会議費	32,393	
旅費交通費	946,788	
通信費	766,103	
事務用消耗品費	857,871	
修繕費	47,674	
水道光熱費	632,550	
新聞図書費	43,904	
諸会費	116,000	
支払手数料	68,400	
リース料	379,411	
支払報酬	409,500	
地代家賃	4920,300	
租税公課	83,000	
雑　費	193,855	
電話代	23,918	
印刷費	206,756	
海外出張旅費	125,220	
支払利息	24,493	
雑損失	1,400,419	
管理費合計		25,920,797

■貸借対照表（2010 年 3 月 31 日現在）

［単位：円］

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
【流動資産】	8,464,962	【流動負債】	10,281,420
現金・預金	4,034,333	短期借入金	2,400,000
ドル預金	292,748	未払金	1,922,194
ユーロ預金	27	預り金	963,234
受取手形	1,862,490	前受金	948,992
売掛金	812,732	自由学校前受金	4,047,000
商品	1,262,632		
【固定資産】	200,000		
出資金	200,000		
		負債の部　合計	10,281,420
		正味財産（純資産）の部	
		正味財産	-1,816,458
		正味財産の部　合計	△1,816,458
資産の部　合計	**8,464,962**	負債および正味財産合計	**8,464,962**

■収入と支出の内訳

活動カレンダー

◆2009 年度に PARC が賛同・主催／共催・協力したキャンペーン・講演会・イベントなどをご報告します

《講演会・イベント》		
2009 年 4 月	アースデイ東京 2009（代々木公園）	出店
4 月 12 日	講演会「日の丸・君が代」問題って何！？～元日本兵が語る「戦場での日の丸・君が代」と東京の公立学校における「日の丸・君が代強制」問題～	主催：PARC 自由学校
5 月 28 日	対論集会　スリランカ内戦の行方と日本の役割	パルシック＆IMADR 共催に協力
5 月 31 日	スピークアウト for アクション：イスラエルを変えるために	実行委員団体として参画
6 月 7 日	公開シンポジウム　新自由主義の終わりと連帯経済―お金・仕事・暮らしを人びとの手に取り戻す―	PARC 会員総会シンポジウム
6 月 3 日	緊急報告：危機に立つ生物多様性 「天国に一番近い島」で今何が？　ニューカレドニア・ニッケル開発事業を事例に	主催：国際環境 NGO FoE Japan、地球･人間環境フォーラムに協力
9 月 19 日	DAME IHA TIMOR　東ティモール記念コンサート　～東ティモールに平和を！国づくり 10 年の歩み～	主催：パルシックに協力
10 月	グローバルフェスタ JAPAN　2010（日比谷公園）	パルシックと協働で出店
10 月 15 日	連続セミナー「人々の生物多様性」	協力団体
11 月 7～10 日	アジア連帯経済フォーラム 2009	事務局団体として参画
11 月 3 日	超カンタン！英語で 9 条を語ろう！！11.3	主催：PARC 自由学校
11 月 4 日	東ティモール住民投票 10 周年記念スピーキングツアー「平和構築とジェンダー・ジャスティス～東ティモールにおける女性への暴力 と正義の行方」	主催：東京東ティモール協会に賛同・広報協力
11 月 27・28 日	国際有機農業映画祭 2009	実行委員団体として参画
12 月 17 日	岡村淳さん映像上映会「人は、なぜ移動するのか―ブラジル移民の場合」	主催：PARC 自由学校
2010 年 3 月 19 日	講演会　「債務、貧困、気候変動　変革が進む南米エクアドルは地球規模の課題にどう取り組むのか　ジュビリー・エクアドルのデルファ・マンティージャさんに聞く」	共催
3 月 12 日	子ども兵士の現実を知っていますか？　映画『見えない子どもたち（Invisible Children）』上映会	主催：PARC 自由学校
《声明文・要請文など》		
2009 年 5 月 19 日	コロンビアでの水道民営化を禁じる憲法改正のための国民投票実現に向けての国際署名	賛同
5 月 20 日	スリランカ人道危機について日本政府宛書簡	賛同
6 月 9 日	ペルー北東部（アマゾン源流域）での多国籍企業による石油・天然ガス開発などに抵抗する先住民族への警察の弾圧に対する日本の市民からの緊急声明	賛同
6 月 25 日	市民団体共同声明 日本政府に水銀輸出禁止法の制定を求める	賛同
7 月 15 日	原子力関連プロジェクトの公的信用付与の取り扱い及び原子力固有の問題の確認に関する NGO 提言書	賛同
10 月 3 日	世界反貧困デーに「反貧困」の意思表示を！　反貧困世直し大集会 2009　～ちゃんとやるよね？！新政権～	賛同
11 月 17 日	国際協力・ODA の抜本的見直しに関する国際協力 NGO の共同提言２００９	賛同
11 月 18 日	イスラエルに対する公正と正義の視点に立った意思表示を求める要請書	賛同
11 月 30 日	ODA 関連「事業仕分け」の議論の活用と有償資金協力を，含めた ODA の抜本的見直しを求める意見書	賛同（提出団体として連名）
12 月 29 日	民主党・社民党・国民新党連立政権に対して日本の中東政策の抜本的な転換を求めるガザ虐殺を繰り返させないための共同声明	賛同
2010 年 2 月 15 日	「ODA の見直し」検討プロセスに関する要請	賛同
2 月 22 日	朝鮮学校への攻撃を許さない！共同アピール	賛同
2 月 26 日	東ティモールの日本軍性奴隷制被害者に関する要請書 ―日本軍によるポルトガル領ティモール侵攻 68 年目の日に―	賛同

理事／事務局スタッフ紹介と会員の皆様へのメッセージ

■代表理事

細川弘明（ほそかわ・こうめい）
オーストラリア先住民族（アボリジニ）の土地権運動、環境知識などについて 25 年ほどフィールドワークを続けてます。その前は青年海外協力隊でボリビアにいました。ウラン採掘反対運動に参加したのをきっかけに、開発批判、資源エネルギー論、先住民族復権など、色んな活動に首を突っ込んでます。大学では現場主義的リサーチに学生を巻き込もうとあの手この手･･･。

普川容子（ふかわ・ようこ）
OL と NGO の二足のわらじをはいていましたが、途上国の債務問題にはまって NGO 一本の道に。事務局スタッフ兼理事でしたが、現在育休中です。PARC には、自由学校・AV・オルタと他の NGO にはない、情報発信のツールと「場」を持っています。その中身をつくる活動にぜひ会員の皆様もご参加ください。

■理　事

内田聖子（うちだ・しょうこ）（事務局長）
気がつくと今年で PARC に 10 年。立ち止まることなく、いつでも走りながら考える･･･壁にぶつかっても人に助けられながら生かされる･･･それが PARC のよき文化と思います。2010 年は日本とアジアの「連帯経済」の広がりに全力を尽くしたいと思います。それとなぜかこの場をお借りして「わたしが変わる」の第一歩・禁煙宣言！

大江正章（おおえ・ただあき）
コモンズという限りなく NPO に近い零細出版社を悪戦苦闘しながら経営（？）しつつ、農や食や地域に関するルポを書いています。パルクとは『オルタ』の編集委員でかかわりはじめ、ずぶずぶと深入りしてきました。最近は自由学校で生徒さんの人生を変えることが快感です。

佐久間智子（さくま・ともこ）
今はフリーで世界の食料や水の問題について翻訳・著述活動をしていますが、かつて NGO スタッフだったこともあり、心情的には事務局に近いかもしれません。これからも PARC という社会の財産（？）を共に支え、共に有効活用していきましょう。どうぞよろしく。

穂坂光彦（ほさか・みつひこ）
かつて海外の援助機関で働く傍ら「世界から」を購読し、オルタな情報に基づいて民衆の視点で考えることを知りました。世界の構図は変わりましたが、アジアのスラム居住者の新しい動きを追い、日本社会との通底する課題、相互に学びうる試み、を探っています。

菅野芳秀（かんの・よしひで）
山形の百姓です。水田と自然養鶏との循環農業を息子と二人でやっています。パルクの理事になりました。2 年間です。凋落する産業としての農業をどう守るか、ではなく、“時代を拓く農”を主張し、地域一アジアに創造的にかかわって行きたいと思い、やってきました。パルクの理事としてどんなことができるのかなんて重く考えずかるーくやっていこうと思います。会員としては 30 年になります。でもね・・酒を飲むことだけが上手になってさ・・、60 歳。年寄りだなぁなんて思うなうよなぁ。これでも村に帰れば若手のホープなんだからよぉ。

小池洋一（こいけ・よういち）
日本の政治、経済は混迷をきわめています。日本のラテンアメリカ化とか、格差の拡大に関連して日本のブラジル化などと言う人もいますが、ラテンアメリカ、ブラジルはともに、社会がかかえる問題を解決しようと懸命な努力をしています。参加型予算、連帯経済、企業の社会的貢献などがそれです。そこで最近では、日本がラテンアメリカ、ブラジルから学ぶという意味で、少し手前味噌ですが、日本のラテンアメリカ化、ブラジル化（の必要性）を宣伝して回っています。

湯浅　誠（ゆあさ・まこと）
「世界の貧困」と「日本の貧困」をつなげたい！ということで、昨年から理事をやらせてもらっています。昨年度は「活動家一丁あがり講座」を行い、生きづらさを感じる若者たちが声をあげるためのお手伝いを始めました。また、今年は「日本の貧困」をテーマにしたＰＡＲＣビデオも作成する予定です。なかなか予定が合わず、理事会出席率は必ずしも高くないので恐縮！ですが、今後ともよろしくお願いします。

■事務局スタッフ

京野楽弥子（きょうの・さやこ）/PARC 自由学校担当
自由学校を通して、「もっと知りたい→動きたい→つながって自分の足元から変えていきたい」と受講生の方がたが思ってくれたらいいなあ～と思っています。会員の皆さんに「こんな自由学校があったらいいのでは？」と気軽に教えてもらえたら！と願っています。

小池菜採（こいけ・なつみ）
/オーディオ・ヴィジュアル（AV）担当
取材や調査で、知らないことを知るたびに自分の思い込みがひっくり返ってわくわくします。そんなわくわくを提供する作品を作りたいと思っています。一方的に情報を利用するのではなく、そこから関係を紡いでいく取材を目指し、カメラと三脚をしょってあちこちに出没中。

高橋真理（たかはし・まり）/総務・経理担当
ひょんなことで 2008 年より PARC に関わらせていただくことになりました。毎日が勉強の日々です。会員の皆さまと、オルタナティブな社会や生き方を、模索構築していけたらと思っています。今年から自主サークル PARC ガーデニング部を立ち上げ、家庭内食料自給率アップを目指します。

田中　滋（たなか・しげる）/雑誌『オルタ』担当
2010 年４月よりＰＡＲＣのスタッフに仲間入りしました。あだ名は中学の頃から「ゲル」と呼ばれ続けて十数年。皆さんもお気軽に「ゲル」とお呼び下さい。まだまだ勉強することだらけですが、よりよい「オルタ」のために頑張っていきます。気づいたことは何でも気軽にお便り下さい！

特定非営利活動法人
Pacific Asia Resource Center
アジア太平洋資料センター
〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1-7-11 東洋ビル3F
TEL.03-5209-3455 FAX.03-5209-3453
http://www.parc-jp.org/ E-mail office@parc-jp.org